

第 17 回地方自治政策研究会参加報告書

岡山地方自治政策研究会主催
(平成 20 年 2 月 26 日開催)

谷口 順子

「地方議員のためのカウンセリング入門」

講師：心理カウンセラー 富田 富士也氏

富田氏の著書「地方議員のためのカウンセリング入門」を参考にしながら、メインは富田氏の話によるレジュメのないセミナーだった。以下に講義内容を要約する。

議員は、選挙により信頼を負託された唯一法律で認められたカウンセラーであり、声無き声を聞くことが原点である。議員こそまちのカウンセラーであり、ひととかがかわるのが仕事である。その仕事の中で、一番濃密なのが「相談業務」である。今の世の中は、物質的に恵まれているが、人々の心が寂しい状態であり、誰かに悩みを聞いてもらいたいというひとで溢れている。その受け止める相手こそが地方議員である。

「甘える」という行為は、相手が自分を受け止めてくれるかどうか、相手を信じるという勇気が必要だ。この甘える勇気、信じる勇気をもつことで、ひとから支持される人間（議員）になれる。この「甘える」と対極なのが「虚しさ」である。所謂「先生」と呼ばれる人は甘えることができない。これは、「先生」と言われる事で傷つくリスクを背負ってこなかったためである。こうした「甘えられない人」が甘えると、依存になり、姑息な甘え方になってしまう。例えば、すぐ権利を主張するようになる。具体的には、今、学校社会の問題となっている「モンスターペアレント」である。この「モンスターペアレント」は、幼少期に甘えることを知らずに育ったため、甘え方がわからず、すぐ権利を主張してしまう人たちであるのだ。

しかし議員は最後には甘えるしかない。いかに自分が支持者や家族・身近な人に甘えることができるかどうか である。

「不条理」という言葉があるが、これは思い通りにいかない場合に年齢に関係なく突然襲われるものであるが、他人から見たら恵まれているように見えても、その人自身はそうでもないことが実際には多いのだ。この「不条理」を見定めることのできる議員になってもらいたい。「不条理」=無力であり、絶対解決が不可能なものであるため受け容れるしかないのだ。この「不条理」の時がお互いが無力であり、一番お互いがつながる状態なのだ。

しかしその関係から決して逃げないことである。例えば親子の関係 ただ聞くしかできない、ただ傍にいただけしかできなくても、子どもにしてみれば、例え解決できなくても、親が自分の無力に向き合ってくれた、という思いを抱き、信頼関係を育む事ができる。

結果、親子の関係がより濃密になることができる。

1965年より前は、「向こう三軒両隣」で、人間関係が当たり前身に付く時代であったが、高度成長期を迎え、短時間で効率よくやることが美德とされる時代となった。この合理化を人間関係にあてはめてはいけなかったのに、人間関係を便利にするものが増えることで結果、合理化することとなってしまった。これが結局、家庭崩壊へと繋がっていくこととなる。

また、1972年に偏差値が導入され、評価主義へとなっていく。ひとの人格までもがすべて数値化され、人間関係を損得勘定で見るようになった。素直になれない子ども、何も言わない子どもが増えていった。今は人間関係をつくり上げる時代である。

現代社会で喪失されているものは、関係性・共感性・自己肯定感の3つである。

まず、関係性の喪失であるが、例えば親を殺す子ども というのが顕著な例であろう。

親との関係性が喪失されているから、平気で親を殺すようになってしまうのだ。

極論すれば、あまり子育て支援を充実させすぎると、子育ての原点から大きく離れてくる。エンゼルプラン等によって社会が子どもを育てる時代となっているが、本当は、子どもは親が育てるとするのが原点なのだ。「自助なきところに互助はない 互助なきところに公助はない」である。

次に共感性の喪失であるが、共感性 = 「愛」である。善だけではなく悪をも含めての共感性である。この共感性はもちろん関係性の中から生まれるものである。

三点目は、自己肯定感の喪失である。「肯定」 = 存在を必要とされていることである。例えば、「僕が死んでも、1年も悲しまないでしょう？」という言葉 これは実は自分にもっとかまって欲しいという思いからの言葉である。この自己肯定感は、自分を必要としてもらったり、自分の存在を確かめられるようになって初めて抱くことができるものである。

最後に、カウンセリングの基本である、「きく」ということについて。

まず、「聞く」(= 言葉を聞く : うなづく。邪心なく素直に聞く) こと。

その次の段階として、一步相手に踏み込んだ「訊く」(= 訊ねる : 関心を寄せて相手に質問する) こと。これによって「きき手」側が傷つくリスクを背負ったことになり、一步踏み込んだ関係になったということである。

それから「聴く」(= 心を聴く : 言葉にならない思いを確認する) こと。これが一番リスクを背負うこととなる。

ひとは誰も自分の話を聞いてもらいたいと願っている。この「聞く」「訊く」「聴く」「聞く」・・・を効果的に使うことで、さらにお互いの関係性が深まっていく。

ここまでレクチャーを受けた上で、住民に訴えかける議員から「住民の心」を聴くことのできる議員になるための実践トレーニングとして、この「聞く」「訊く」「聴く」のロールプレイを2人ペアになって行った。じっと「聞く」こともなかなか難しいものだった。政治は光の当たらないところに光を当てるものである。そのためには、言葉にならない声をどれだけ聴くことができるか その力量が議員には求められると考える。

この3つの「きく」をしっかりと自分のものにし、本当に市民の皆さんから信頼される議員となれるよう、今日いただいたレクチャーを胸に、これからも研鑽を重ねてまいりたい。